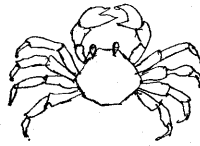


# 対立意見についての話し合い

ルビー・フレッチャー



元ユタ大学（ソルト・レイク市）付属ナースリースクール、幼稚園、小学校低学年の教師。  
現在ユタ大学教育学講師。

ナースリースクール、幼稚園、小学校一、二年で対立意見を問題にするかとおっしゃるのですか？ そんなに幼ない経験に乏しい子どもに……と？ そんなことが子どもの問題になるでしょうか……と？

もちろん！非常に幼い子どもにとって相対立する性質もった重大な問題、つまり明白な回答を持たない問題で、彼らが成熟するにつれて違った形で幾たびも幾たびも考えなおさなければならぬ基本的な人間関係に関する問題がある。幼児にとってもっともむずかしいことは、この世界には矛盾対立というものがあつて、それがいつまでもつづくのだということを知ることである。

二歳から七歳の幼児は、未熟さと経験不足の故に、断定的な結論や、画一的な行動を要求する。「今、ここで」即座に「白黒をつけたい」という要求は、教師をしばしば困らせる。幼児期に基本的な態度や概念形成の時期であるので、このようなときに教師がどのような態度をとるかということは重要である。

すべてのとはいわないが、家庭で教える空想物語のあるものは、学校場面では扱いにくいことがある。その例をナースリースクールにみよう。

『十二月はじめのある日、四歳のジュディがナースリースクールの遊戯室にはいつて来て大声でいった。「ミス・サンダー

ス、ママとパパがいったわよ。うちの子たちにはサンタクロースのつくり話はしないって。プレゼントはママとパパがくれるのよ」

四、五人の子どもがジュディの方をみたが大部分の子は無頓着に遊びつづけた。

ミス・サンダースは「ジュディ、去年のクリスマス마스のことおぼえてる？」と応じた。

「ええ、おぼえてるわ。大きなツリーと、あかりがあった。あたし泣くお人形もらったし、それから……」

ミス・サンダース「あなたのおうちたのしかったでしょう」

ジュディ「ええ、クリスマスマスが早く来るといいな。おままとのお血がほしいの。それに……」

ミス・サンダース「そうね、ジュディ。ママとパパはクリスマスを子どもたちみんなに楽しくさせようっていろいろ考えていらっしやるのよ。あるおうちではサンタクロースをたのしみのひとつにするけれども、またあるおうちでは、べつのおもしろいことをしてたのしいクリスマスをするのよ」

あとでミス・サンダースはひとりになったとき、さっきの場面をずっと考えてみて自問した。自分はジュディに助けになるように答えてやったのだろうか。ジュディのいったことは、他の子どもにどんな影響を与えたのだろうか。

二歳児、三歳児、四歳児は大い自分のことにいちばん関心が

あることをミス・サンダースは知っている。それぞれ、自分の家族のことを、よそのうちとはずいぶんいろいろな点で似てはいるが、やっぱりちがったところがあることを理解している。それぞれの子どもが家族に好意をもち、自分の家庭が教師から尊敬されていると感じていることが大切である。家庭の行事や儀式は、楽しみと愛情を計画し、わかちあうための重要な生活である。各人に与えるそうした出来事の影響そのものに比べれば形式などはたしいた問題ではない。

サンタクロースの空想物語ばかりでなく、イースターの兎、歯の妖精トウキョウなど多くの子どもが信じ、やがて成長とともに顧みなくなるものがある。ミス・サンダースは、自分のクラスの子どもたちが提出するたくさんちがった家族のパターンに敬意を表わしていることを示したいと思った。

しかしまた彼女は、幼稚園が、正確な有益な知識を与える源として信頼するに足るものであるとのイメージを幼児に抱かせたいとも考えた。彼女はわざわざ空想を起こさせたり、不必要に助長したりすることはせず、ひとりひとりの子どもに個別に対応し、家庭の経験から満足を得られるように援助しなければと考えた。ナースリースクール場面の非画一性は、子どもたちに最大限の個人的反応を許すものである。

イースターの空想物語

幼稚園および小学校一、二年の教師は、集団討議の形で空想物語を扱うことが必要だということをしばしば感ずる。次に述べるのは、ミス・グリーンのリースターのころの一年生の場合である。

『子どもたちが、集団計画と討議の時間に集まったとき、ひとりの男の子が教師に対して発言した。「ミス・グリーン、ゲリーはリースターの兎なんていないっていつてるよ。ほんと?」クラスは静まりかえって、ミス・グリーンは答に熱心に聞き入りうろたえているようであった。

「ええ、たしかにリースターの兎のお話があります。そしてたくさんのおうちでリースターに兎で楽しんで、さわいんだりすることがあるでしょう。ゲリー、あなたのおうちではリースターの兎でおもしろいことがある?」

ゲリーは家でのリースターの朝のことを話した。ついで他の子どもたちもリースターのおもしろかったことを語った。クラスのもの皆が報告したいろいろなやり方を受けいれ楽しんでようであった。ある話にはリースターの兎が出てきたし、あるものにはそれがなかった』

あるひとりのおとなの参観者は、それでは子どもたちの興味を殺してしまうからといって、そのようなことで子どもたちの頭を曇らせてしまうことはゆるし難いと批判してきた。ミス・グリーンは、彼女のクラスの子どもの大部分はリースターの兎はあそびであることを知っているのであり、ゲリーはクラスの中では幼い

ほうの子であることを説明した。いろいろなおりに、子どもたちは彼の幼さに同意を示さないことがあった。だからもしも彼がほんとうのリースターの兎を信じるとかたく主張したら、彼らにまたからかわれるかもしれない。そうしたら、教師は彼を困らせずにすむようにしてやり、彼が支えを求め、助けをねがえばいつも、空想と現実とのすきまを埋めてやって、信頼するに足る学習源としての教師の役割を確実に遂行するであろう。この場合は、リースターについて多くの違ったやり方が報告されたので、ゲリーのリースターは他の子のと非常に似ていた。多分ゲリーにとつてリースターの兎はそれほど重要でなくなつて、家族の催しの全体の方がだんだん重要になつてくるであろう。それがミス・グリーンの希望であつた。

たしかに、空想のごっこあそびはおもしろいが、ある子どもらにとつてはそれが本当ではないことに気がつくときがある。教師はそのときの苦痛をやらわらげてやるようにしなければならぬ。

#### 家庭によるやり方の違い

幼児にとつてめんどろな問題は、家庭による育児法の違いから起こってくる。毎週のおこづかい、子どもがひとりだけでいける範囲、自分でやることを奨励されることなどに関する家庭のやり方の違いも問題の起こる源になる。次のことは、ミス・ベネットの幼稚園で、学年末に「わたしの家族」という短い単元をやつたど

き起こったことである。

『この勉強のある部分は、ミス・ベネットのノートの中に「うちの家族についての問題」と題されている。子どもたちは家族の他の人たちに對して問題を起こしてしまったような行為とか、彼らが困った問題について話をした。ミス・ベネットの助けで、どうしたらその問題を解決することができるかを話しあった。ミス・ベネットには次のようなことがわかってきた。すなわち、子どもというものは友だちが持っているものを何故自分が持つことができないのか、また友だちがしてよいことを何故自分としてはいけないのかを理解することが特にむずかしい。ミス・ベネットは彼らに自分の問題をより広い観点からながめさせるようにしてみた。たとえばジミーが近所の友だちのマークと同じように、一週に二十五セントのおこづかいがもらえないことにたいへん不服を示していることから問題が起きていることを述べたとき、ミス・ベネットは、もしそれだけのおこづかいがもらえたらどうしたいのかときいた。彼は、そうしたらキャンデーとお店でみたおもちやの飾り物を買うんだと答えた。ミス・ベネットがそういう飾り物やキャンデーを買ったことがあるかとたずねてみると、お買物にいったときのめば、お母さんやお父さんが買ってくると答えた。でももしおこづかいがあれば、もっと始終、もっとたくさんのが買えるだろうというわけであった。そこでミス・ベネットは、二十五セ

ントのおこづかいをもらっているマークに、それをどうやって使ったかたずねた。マークは五セントは銀行に預けるし、欲しいものでもあまり高いのでたくさんのものは買えないといった。小さなトラックや飛行機が買えるようにたまるまで長いこと待たなければならなかった。また、キャンデーを家中の人に分けて上げるのでなければ、お金をみんなキャンデーにつかってしまっただけで、お母さんがいのでそれとすぐなくなってしまうとも話した。そこでおこづかいをもつだけでは、ほしいものがみんな買えるわけでなく、またすべての問題が解決するのではないということが子どもたちみんなにわかった。みんな、見たものは何でもほしくなることについて話し合い、思うようになるということはずかしく、また待つこともたいへんむずかしいものだどわかった。』

この問題に限らず、他の問題についても、どの家のやり方、考え方がよりよいかを決めることはできないように思われる。子どもらのすべきことは、彼らが経験した場面に処するよりよい方法をみつけることなのである。ミス・ベネットのクラスでの話し合いは、自分自身の感情や行動の理解を進める上に役立ったであろう。あるいはまた意見の対立や葛藤からくるフラストレーションを処理するためにもっと違ったやり方を見いだすのに役立ったかもしれない。またねがわくは子どもたちが自分とは違った見方に気がつき、その人にとっては違った考えが価値があるのだという

ことをわかるようになってほしいと思う。

要するに、二歳から七歳までの子どもの対立する意見は、どのように取扱ったらよいものであろうか。

教師は多くの仕方で、子どもに個人的に対応しなければならぬ。教師は批判をぬきにして、それぞれの場合のその家庭特有のやり方を受容しなければならない。子どもたちの関心の的となっているように思われる問題は、十分に話し合う時間を与えるべきである。空想と現実と両方とも価値があることを認めながら、二つを区別していくことを助けなければならない。教師が自分の好きなやり方をお手本として掲げることが、差し控えなければならない。

各年齢の子どもの教師は、家族内の経験を積極的に学習することを進め、対立する意見に結びついた知識を深める責任があるし、またその機会を持つようにしなければならない。子どもが世界を正しく理解して行動するようになるのは、こうした初期の経験と概念をもとにすることなのである。

x x x

すべての子どもは成長したいという基本的衝動をもつ——それは彼がなり得るものになろうとする努力、もっと自分ら

しくなり、もっと豊かな、完全な自己となろうとする根本的な努力である。この努力は各人の個人の内側の世界で起る。どのようなものになるかは、この内側の世界を特徴づけている人間関係条件、経験の豊かさに依存している。

創造的な自己、積極的な自己、内的力をもった自己は、あたたかい支持的な永続的な人間関係をとおして発達する、この発達はこうした相互作用、人間関係の値の如何による。人間関係の基本的要因は、個々の子どもが、特に家庭や学校における重要な人々によって真価値を認められていると感ずることである。

子どもの生活において重要である他人から完全に受容され、重要な人々によって価値を認められるならば、子どもは自己を受け容れることができ、自己自身に満足することができ、安全感をもつことができるようになる。それに加えて、このような過程によって、子どもはまわりの世界が価値ありとするものの内容を知ることになり、子どもの才能や能力を発見し、発達させ、表現させる道が開かれる。こうして、成長への衝動が育まれ、生き生きとし、のびのびと発達しつづけるのである。——H・ガーソン・モーガン「家庭および学校における自尊心の養成」子供の教育、一九六二年二月、二七八頁

(川村学園短期大学・帆足喜与子訳)